

おおやまどうちゅうひざくりげ

## #43 大山道中膝栗毛

作者：鈍亭魯文（どんてい・ろぶん 1829-1894）

刊行：安政4年（1857）



### 📖 解題

#### ■ 内容

本書は、鈍亭魯文の膝栗毛物の第4作目で、安政4年（1857）に、新庄堂糸屋福次郎から刊行された。

十返舎一九の膝栗毛物を模倣しており、主人公の弥次郎兵衛と喜多八が、江戸から相模の大山へ参詣する道中が、全25丁に描かれている。



[K97.64/3]

「大山詣はもともと信心のための参詣だが、当時のそれは物見遊山の傾向が強かった」と『武相膝栗毛』に収録されている「大山道中膝栗毛」の解題でも述べられているが、弥次郎兵衛と喜多八の道中も、ご多分に漏れず、江戸から大山に至る各地で好き放題をし、恥をかきまくる。その旅程は、大森一品川—川崎—生麥—神奈川—程ヶ谷—境木—戸塚—藤澤—大山道—良辨滝—大山—号雨降山—神田となっているが、「良辨滝」以外では、あまり大山詣という雰囲気を感じることはできない。

本書が刊行された当時は、講集団による旅行が盛んで、大山阿夫利神社へ行く大山詣が盛況であったことから、大山詣を題材にしたと思われるが、作者自身は、大山詣をしたことがなかったようで、最後に「まことにこまったことには作者いまださんけいしたことがなく、どんなことをかいてよいやら一向ふあんないゆゑ、画工にまかせてぶんはほんのおまけにしるすなり」という記述がある。

当館以外の所蔵は、国文学研究資料館（裏表紙欠）、蓬左文庫尾崎久弥コ

レクションで確認できる。

## ■ 作者

鈍亭魯文は、文政12年（1829）、江戸京橋檜屋町に生まれた。本名を野崎文蔵といい、假名垣魯文の別号がある。幕末から明治前期の戯作者であり、『滑稽富士詣』（1860年）、『万国航海西洋道中膝栗毛』（1870年）、『牛店雑談安愚楽鍋』（1871年）などの作品がある。明治6年（1873）に、神奈川県庁の雇員となったことを契機に戯作者を辞めたが、明治7年に横浜毎日新聞に招かれて雑報記者となった後は、仮名読新聞社やいろは新聞社を起こす等、いろいろな新聞に関係し、際物師的手腕で有能な新聞人として活躍した。

絵師の一松齋芳宗（いっしょうさい・よしむね）は、江戸時代末期から明治時代にかけての浮世絵師で、文化14年（1817）に生まれた。姓は鹿島、俗称は松五郎といい、19歳の時に歌川国芳の門に入った。画名は芳宗、一松齋の号を与えられ、武者絵、役者絵などを描いた。

## 📖 参考文献

<影印・翻刻>

「大山道中膝栗毛」（『武相膝栗毛』（神奈川県郷土資料集成 10）神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編 神奈川県図書館協会 1983）[K97/46]

<影印>

「大山道中膝栗毛」（『膝栗毛文芸集成 第34巻』中村正明編集・解題 ゆまに書房 2016）[K97/168/34]

<参考文献>

『浮世絵事典 下巻』吉田暎二著 画文堂 1971 [721.8/70/3]

『武相膝栗毛』神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編 神奈川県図書館協会 1983（神奈川県郷土資料集成 10）[K97/46]

『品川の大山信仰』品川区教育委員会 2009 [K17.64/55]

『膝栗毛文芸集成 第34巻』中村正明編集・解題 ゆまに書房 2016 [K97/168/34]

『大山詣り』川島敏郎著 有隣堂 2017 [K17.64/61] [163.1/143]